

日本脚本家連盟主催

放送脚本新人賞 第2回アニメ部門佳作  
第1回寺島アキ子記念奨励賞

『婆娑羅姫 BASARA-KI』

瀬多海人

①

京の町・早朝  
一三六一年の京。

薄暗い都の大路に黒いモヤが地を這うよ  
うにたちこめている。モヤの中から破れ  
た胴丸をまとった雑兵たちが立ち上がる。  
まるで幻のようには輪郭がおぼろげだが、  
紅い眼だけが爛々と輝いている。

②

佐々木屋敷土蔵・早朝

薄暗い土蔵の中。天井付近の明かり取り  
窓から、わずかな光が一角に差し込んで  
いる。  
にわか光が陰り、明かり取り窓から黒  
いモヤが入り込むと、土蔵の隅に鎮座し  
ている黒鞘の太刀“鬼斬”に向かつてゆ  
く。鬼斬をぐるりと囲んだモヤはさらに  
包み込もうとするが、バチツという小さ  
な火花があがる。土蔵の外へと、逃げる  
ように消えてゆくモヤ。

土蔵の外から、甲高い少女の声が響いて



三 奈 「中段に構えたまま、解こうとはしない。  
情けない！」

悔しいそぶりも見せず、ただ苦笑いを浮かべる高秀。

三 奈 「カッとして」兄上！ そのへらへら笑いをおやめください！」

高 秀 「この顔は生まれつきなんだがなあ」

三 奈 「だいたいっ！ この佐々木家を継がれる方が、この程度の腕で情けないと思われないのですか！ いつもいつも三奈に負けて、悔しがりもせず」

高 秀 「まったくくだよ、むしろお前が男だったらと……」

ぎろりと三奈にらみつけられ、首をすくめる高秀。

高 秀 「ふう……今日の姫君は朝からご機嫌斜めのようにだ」

首をすくめ、おどけたような仕草とともに立ち上がる高秀。

三 奈 「どこに行かれるのですか、まだ話は終

わっつてはおりません！

高秀 「朝稽古も説教もここらでおしまいだ。

俺も忙しい身なんでな、そろそろ侍所に出

仕せねばならん

三奈 「兄上！お待ちくださいっ

追おうとする三奈に追いつがる清二郎。

清二郎 「お嬢！まったく：：兄上なのです

から多少は手加減をされればいいものを

三奈 「兄上だからだっ！

清二郎を振り切って、高秀を追ってゆこ

うとする三奈だったが、ドクンと脈打つ

ような痛みを感じ、思わず胸をおさえる。

三奈 「んっ：：」

④ 佐々木屋敷土蔵・早朝

土蔵の片隅にある鬼斬がガタツと震える。

震えが次第に大きくなる鬼斬から光が膨

らんでゆき、その中に鬼の顔がゆらゆら

と浮かび上がる。

⑤ 佐々木屋敷中庭・早朝

ドクン、ドクンと早くなる鼓動に合わせ  
て、三奈の身体に重なるように鬼の姿が  
現れては消える。

三 奈 「 なんだ：：この：：感：：覚：：」

清 二 郎 「 お、お嬢！？」

清 二 郎 が 駆 け 寄 る と、 這 い つ く ば る 三 奈  
の 背 に 重 な っ て い た 鬼 の 姿 は す ー つ と 消  
え て ゆ く。 三 奈 の 顔 色 は 悪 く、 額 か ら は  
だ ら だ ら と 脂 汗 が 流 れ て ゆ く。  
ぼ ん や り と し た 視 界 の 中、 土 蔵 に 入 り こ  
も う と し て い た 黒 い モ ヤ が 地 を 這 っ て ゆ

く の が 三 奈 に 見 え る。

三 奈 「 あ れ：：は：：」

清 二 郎 「 お 嬢 ！ 誰 か ！ 誰 か い な い か ！ 」

三 奈 「：：大 丈 夫：：だ：：そ れ よ り、 あ

れ

清 二 郎 の 腕 を 振 り 払 い、 立 ち 上 が る 三 奈。  
さ ら に 一 歩 足 を 踏 み 出 そ う と し た も の の、  
そ の ま ま 三 奈 の 視 界 は ぐ る り と 天 地 が 逆

になる。バターンと大きな音とともに地

面に倒れ込む三奈。

清二郎「お嬢！　しっかりっ！」

⑥ 佐々木屋敷外観・早朝

よく手入れされた庭の真ん中に屋敷の離れがある。黒いモヤが離れに向かって這うようにして流れてゆき、やがて達する。モヤは離れの中を伺うように渦を巻いているが、それ以上、中には入り込めない。

⑦ 佐々木屋敷書院・早朝

佐々木道誉（きみ）と鬼阿弥（おに）が離れの書院にて茶を飲んでいる。

道誉は武人とは思えないほど穏やか。一方の鬼阿弥は対照的に顔のあちこちに刀傷が残り、歴戦の武人を感じさせる。

鬼阿弥「姫様は今朝も稽古ですか」

道誉「相変わらずのじゃじゃ馬娘だ。誰に似

たのだから

鬼阿弥「妾腹とはいえ、御気性は誰よりも殿にそっくりではありませんか」

道誉はムツとする。

鬼阿弥「それでどうされるので？」

道誉「なにがだ？」

鬼阿弥「姫様を引き取ったのは一昨年。よもやどこぞの家に嫁がせるために引き取ったわけでもありますまい？」

道誉「人並みに嫁にいつてくれれば、と思わないでもない」

鬼阿弥「しかし、あの御気性——そして、なによりも（声を潜め）並外れた、妖を感じる力。おなごとしての幸せをつかむには、

いささか……」

道誉「言うな」

茶碗を取ろうとして、手が止まる道誉。静寂の中で、鹿威しが鳴り響く。

道誉「囲まれているか……？」

鬼阿弥「……ですか。いくさも続きました



ゆえ、血に酔い、迷い出でたる妖もありま  
しょう」  
道誉の表情が険しくなる。  
道誉「だが、これほどの妖気……久しく感じ  
てはおらんぞ。いかなるモノか」  
鬼阿弥「京のどこぞより出でたる妖……いや、  
たしかにこれほどの妖気のモノ、都にはそ  
うはおりませぬな」  
道誉「ならば、京の外より……か？」  
鬼阿弥「思い当たりますかな？」  
道誉「外から入り込み、なおもこれほどの妖  
気を放つ存在……思い当たるは讃岐院」  
かすれた声でつぶやく道誉の額には汗が  
じつとりとにじんでいる。

⑧ 讃岐・崇徳帝陵墓の奥  
崇徳帝陵墓の奥。周囲を切り出した石で  
固められた簡素な石室。  
一本のろうそくが地面でポツと灯る。そ  
れを合図にしたように次々にろうそくが

燈つてゆき、その炎の列が五芒星を形作  
 ると、中央に崇徳帝の姿が陽炎のように  
 浮かび上がる。崇徳帝は髪をざんばらにし、目を赤く血  
 走らせては、ブツブツと呪詛の声を響か  
 せている。時折干渉を受けたかのように  
 姿が乱れ、消えそうにもなる。崇徳  
 一口惜しや：口惜しや：朕を遙か讚  
 岐の地へと追いやった、京の者どもよ：  
 じき同じ目に遭わせてくれようぞ：いま  
 いちど：兵へつわものよ：我が兵ど  
 もよ、我が元に参れ：いまいちど合戦い  
 たそうぞ：  
 ⑨ 佐々木屋敷三奈の居室  
 部屋の中には襖に背を向けるようにして  
 横になつてゐる三奈、そしてその横には  
 心配そうに清二郎が座つてゐる。  
 襖が静かに開き、道誉が難しい顔をして  
 入つてくる。

道 誉 「三奈……倒れたと聞いたが」

三 奈 「背を向けたまま……」

清 二 郎 「実は朝稽古の最中に……」

三 奈 「清二郎……余計なことを言うな」

道 誉 「……清二郎、しばし外せ」

道 誉 の視線を受けて、部屋を出てゆく清二郎。代わってその場所に道誉が座る。

⑩ 佐々木屋敷廊下

三 奈 の居室から出てくる清二郎。緊張に耐えかねたように大きく息をつく。

⑪ 佐々木屋敷三奈の居室

背を向けたままの三奈をじっと見ている道誉。

道 誉 「心の臓を押さえて倒れたと聞いたが、詳しく話してみよ」

三 奈 「いきなりなんですか。普段はろくに顔も見せないくせに」

道 誉 「親が娘の心配をするのは当然だ」

三奈「娘……？ 私は生まれてすぐ捨てられ

た身。父親などいません」

道誉「捨てたわけではない。お前のためだっ

た」

三奈「ではそのまま本多の家に捨て置けば、

良かったではありませんか。二年前……連

れ戻されることなど、私は望んでいなかった

た」

⑫ 回想・本多家屋敷客間

二年前。本多家の屋敷。

上座には道誉が座り、下座の三奈をじろ

りと値踏みするようになっている。

清二郎の父である本多克元（きつもと）が横に

控え、しきりと三奈の様子を気にしてい

る。三奈は晴れ着を着せられているが、

気に入らないという風にかめ面をして、

しきりに裾をいじっている。

克元「ほれ、三奈殿。父上じゃぞ」

三奈「……」

道誉「普段は男のなりと聞いたが、やはり娘

の姿は気に入らぬか」

挑むように睨付ける三奈。

道誉「余人には見えぬモノが見えると聞い

た」

こくりとうなづく三奈。

道誉「そうか……」

克元「殿。やはりお連れになるのですか？」

克元「の問いに黙ってうなづく道誉。」

⑬ 佐々木屋敷三奈の居室

回想から戻って、再び三奈の居室。

道誉「この屋敷に連れてきたときに、言っ

聞かせたはずだ」

三奈「私には常人には見えぬモノを感じる能

力がある。だから手元に連れ戻したと」

道誉「うむ」

三奈「一度は捨てたものの、利用価値がある

と踏んだのですね」

道誉「……」

無言で立ち上がる道誉。三奈に背中を向けながら、

道誉「聞け！これよりわしの許しが出るまで屋敷を出ること、まかりならん」

道誉の言葉に怒り、身体を起こす三奈。三奈「んなつ、横暴な！」

三奈の抗議に耳も貸さずに部屋を出てゆく道誉。

三奈「：：私はあなたの道具じゃない」悔しさに唇をかむ三奈。

⑭ 佐々木屋敷廊下

襖がすつと開き、道誉が難しい顔をして出てくる。襖越しに中の様子を窺っている。清二郎はそれにビクツとする。

清二郎「っ！？」

道誉「清二郎」清二郎「は、はいっ！決して盗み聞きする

つもりなどなく：：」

しどろもどろになる清二郎。

道 誉 「三奈のため、その命を張る覚悟はある

か？」

清 二郎 「え……は、はい！」

道 誉 「無理強いをするつもりはない」

清 二郎 「いまささら否と答えるならば、本多の

家からお嬢……三奈様についてなど参りま

せん」

道 誉 「……ならば来るがいい」

思い詰めたような表情で、先に立って歩

いて行く道誉。

⑮ 讃岐・崇徳帝陵墓

飾り気のない殺風景な陵墓。周囲には簡

素な注連縄が張られている

その周囲に立ち込める黒いモヤの中を破

れた胴丸姿の妖の軍勢が次々と現れ、陵

墓に向かつて行軍を始める。

だが、注連縄に触れた途端、妖は砂のよ

うに崩れ去ってゆく。一瞬ひるんだ後、

今度は刀を振り上げ、注連縄に振り下ろ

すが、切れるどころか同じく砂のように崩れ去る。

妖兵「：：ギギギ」

悔しそうに後ずさる妖たち。その軍勢の

中に巨大な影――源為朝の姿がある。

影（為朝）「おのれ：：小賢しや。院よ、す

ぐにお助け申すゆえ、しばしお待ちください

れい」

⑩ 佐々木屋敷土蔵

中から突然清二郎の悲鳴が聞えてくる。

清二郎「んぎゃ――――――！――

扉がゆつくりと開き、道誉が中から出て

くる。開いた扉の奥に全身を汗に濡らし、

放心状態の清二郎が横たわっている。そ

の胸の上には笛“鬼哭”が置かれている。

⑪ 佐々木屋敷廊下

廊下を歩きながら、誰もいない中庭に向

かって呼びかける道誉。



道誉 「…：…鬼若、いるか」

黒装束の小柄な男がどこからか姿を現す。

鬼若 「これに」

道誉 「京の各所の護りはどうなっておる？」

鬼若 「未だ護りは堅固」

道誉 「影働きの者たちに申し伝えよ。些細な

ことであらうと異変がありしときは、道誉

に伝えよ、とな。そして…：お前は讃岐の

地の様子を探れ」

道誉の言葉が終わると、無言のまま鬼若

がスツと消える。

ボソリとつぶやく道誉。

道誉 「護りに目立った綻びはない。それでい

て、目に見えて京は妖気が濃くなってきた

いる…：」

険しい表情で唇を噛む道誉。

道誉 「やはり我らのいくさになるか…：」

⑱ 讃岐・崇徳帝陵墓・夜

人の気配もなく、闇と静寂に包まれてい

る陵墓の周辺。ろうそくを手にした若い僧が、おっかなびつくり陵墓に近づいてくる。若い僧「毎晩のこととはいえ、このあたりはやっぱり不気味だな。早く見回りを済ませて帰りたいもんだよ」

闇の中に源為朝がぬつと立っている。息を呑んだ僧の頭をむんずとつかむ為朝。若い僧「ひ、ひいつ？」

為朝「若いがまあ良かろう。我らが主上を再びお迎える栄誉を貴様に与えてやろうぞ」

為朝の後ろから、源為朝が気むずかしそうな表情で、ぬつと顔を出す。小柄な老將に見えるが、その目は為朝と同じように紅く輝いている。

為義「若い僧に、そう脅えるな。我ら人ならぬ身。あの忌々しい結界を破れぬ故、院に拝謁する栄誉をまず貴様に与えてやろうと言うのじゃ。まがりなりにも僧職の身、貴

為朝「さあ！ さあ！ さあ！ さあ！」

為朝「さあ！ さあ！ さあ！ さあ！」

為義「おお。いよいよ院が目覚められる」

注連縄の前で立ち止まる僧。その目は大きく見開かれ、ガクガクと震えている。

崇徳帝「我が兵どもよ、よう参った。いまこそ我、其方らの前に再び姿現さん」

崇徳帝「我が兵どもよ、よう参った。いまこそ聞こえてくる。から地の底から響くような崇徳の呪詛が奇声をあげて走ってゆく僧。陵墓の周囲若い僧「うあーっ、うあーっ、うあーっ、うあーっ」

と、僧は恐怖のあまり走り出す。その先

注連縄を切ってしまうことだ。ほれ」

望か？ それが嫌ならば、さあ、早うあの

為朝「それとも素っ首、ねじ切られるのを所

僧は驚きと恐ろしさから首を激しく横に

振る。

様ならばあの縄切れよう」

若い僧「うあー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！  
 促すような為朝と為義の声。  
 大きく両手を振り上げると注連縄を引き  
 ちぎる僧。その瞬間、辺りに突風が吹き  
 荒れる。ゴゴゴと揺れ出す地面。夜空を  
 黒雲が走ってゆく。やがて雷鳴とともに  
 激しく降り出す雨。  
 満足そうな笑みを浮かべる為義。  
 為義「主上よ、院よ、我ら源為義、為朝父子。  
 お召しにより冥府より軍勢引き連れ、お迎  
 えにあがりましたぞ！  
 為朝「いよいよじゃ！  
 我らいま一度いくさ  
 所望いたそう！  
 一際大きな雷が陵墓へと落ち、轟音とと  
 もに辺りを白い光が包み込む。光がおさ  
 まると大きく亀裂を生じた陵墓から、妖  
 気がまるで竜巻のように吹き出し、やが  
 て天高く昇ってゆく。  
 為義「いざ参らん。我らが主のもとへ！」  
 為朝「いざ！  
 いざ！」

妖の軍勢は整然と結界の解けた陵墓へと  
向かってゆく。

⑱ 佐々木屋敷書院・夜

ろうそくの薄明かりのみが灯る部屋。庭  
に面した障子は夜だというのに大きく開  
け放たれている。

道誉は空を見つめている。わずかに出て  
いた月が、流れる黒い雲にあつという間  
に覆われ、闇が訪れる。

道誉「（震える声で）いよいよか」

スツと立ち上がると声を張り上げる。

道誉「誰か！」

声に呼応して家来が廊下に控えている。

道誉「これより急ぎ参内する。支度をせ

い！」

家来「（驚いた表情で）今から、で：：？」

道誉「一刻を争うのだ。早うせいっ！」

道誉の剣幕に、あわてて家来は走り去る。

⑳ 讃岐・崇徳帝陵墓・夜

崇徳帝陵墓の奥。

石室の中は、壁に灯る多数のろうそくに

照らし出されて明るい。中央には、ろう

そくで形作られた五芒星があり、さらに

その中央に崇徳帝の姿がある。その身体

ははつきりと実体化している。その前に

座し、平伏している二人の鎧武者――源

為義、為朝父子である。

崇徳帝はニヤツと笑みを浮かべる。

崇徳「為義、為朝よ、冥府よりよう参った。

大儀

為義「我らの苦勞など主上の辛苦に比べます

れば、いかほどのこともございませぬ」

為朝「左様。我ら父子再び馳せ参じましたか

らには、必ずや主上を京へとお連れ申す所

存

崇徳「おお。さすがは鎮西八郎。剛の者なれ

ばこそその頼もしき言葉。されど……」

崇徳帝は途中で表情を曇らせる。

崇徳「手強き者どもが京にはおる」

為義「まずは身の程知らずにも征夷大將軍を

名乗る足利の者ども」

為朝「足利などなにほどのものか！」

崇徳帝「そしてなによりも、京の護りである

検非違使：：否、佐々木一党と言うた方が

良いか」

為義「古来、検非違使にあつて妖を討つこと

を生業にして参つた者たち：：たしかに、

いささか厄介ではありますな」

為朝「なれば！まずは佐々木一党を根絶や

しにし、その勝利とともに京に戻りましよ

うぞ！」

為義「しかして、いまだ京の結界は堅固。

佐々木と正面よりのいくさ、得策かどう

か」

しかめ面の為義に対して、勢いよく立ち

上がる為朝。

為朝「親父殿、心配顔をしていても始まらん。

我ら端からいくさを所望して、冥府より舞

い戻った身。兵を進めるのに、いまさら躊躇う理由がどこにあるのか！

「控えい。まった為義「主上の御前であるぞ。控えい。まった為朝「評定なんぞ、性に合わんのよ。佐々木など俺が根絶やしにしてくれるわ！結果がいかにかに堅固だとして内より食い破れば造作ないこと。それまで親父殿は高みの見物と洒落込めばいい」

ガハハと大声で笑いながら、大股で出てゆく為朝。その背中を視ながら渋面の為義。

崇徳「良い良い。ここは彼奴に任せてみるのも一興よ」

薄く笑みを浮かべる崇徳。

②① 佐々木屋敷三奈の居室・夜

半身を起こした三奈のもとに夕食の膳が運ばれている。傍らには清二郎の姿。

惴然とした表情で粥を口に運んでいた三



奈の手が止まる。

三奈「清二郎」

清二郎「全部しつかり食べなければ、精が付

きませんよ？」

三奈「うるさい。だいたいお前はいつもいつ

も：：私の何なんだ。母親か？」

清二郎「守役です」

三奈「：：むっ」

うつむき、ぽつりぽつりとつぶやく三奈。

三奈「ならば聞く。守役なら知っているのだ

ろう？」

清二郎「何をですか？」

三奈「：：なぜ、私は本多の家から、この屋

敷に連れ戻された？」

清二郎「それは殿からお聞きになったはず」

三奈「あの男はまだ何か隠している」

清二郎「あの男って：：父上でしよう？」

三奈「あの男はあの男だ」

ため息をつく清二郎。

三奈「私に妖とやらを感じる力があるのは聞

② 清涼殿・夜

いた。ずっと感じていゝ不快感……これが  
そうなのだろう？」  
身を乗り出すようにして、清二郎に詰め  
よる三奈。  
清二郎「さ、さあ？」  
三奈「こんな力があるのならば、なぜ屋敷か  
ら出るな、などと言う？ 利用価値がある  
から連れ戻したのではないのか？」  
清二郎「またそのようなことを……殿はそ  
のような方ではありません。お嬢の身以案  
じているからこそ、屋敷から出るなとおつ  
しやるのです」  
三奈「案じている？ そんなわけあるか。そ  
んなわけ……」  
むすつとして粥を口に運ぶ三奈。  
三奈「私は……はむっ……絶対に、あの男の  
思い通りに……はむはむっ……ならんから  
な。……なつてたまるかっ！」

清涼殿の前庭。玉砂利に膝をついて畏ま  
つている道誉。一段高くなった廊下には  
公卿が難しい顔をしている。さらに向こ  
う、部屋の奥には御簾が降ろされており、  
後光厳天皇（ゴコウケン）の姿がわずかに見える。  
公卿「讚岐、とな：：？それはまさか」  
道誉「讚岐に送った我が手の者が戻らぬとこ  
ろを見ると：：やはり崇徳帝の復活は確か  
かと」  
苛立ったような声をあげる公卿。  
公卿「馬鹿な：：讚岐院の怨霊は鎮まってい  
るのではないのか。ええっ！」  
公卿の苛立ちに道誉は顔をあげ、嘲るよ  
うな表情を向ける。  
道誉「どなた様がそのようなことを：：？」  
公卿「ど、どなたと：：」  
道誉「崇徳帝は日の本一の大魔縁とまで呼ば  
れたお方。完全に鎮めることなど不可能で  
ありましようなあ」  
御簾の奥でガタリと人影が動き、うずく

公卿「し、しかしっ！　今までは鎮まってい  
たではないか！　それがなぜ今！」  
答えを躊躇うような間があつて、  
道誉「恐らくは……血、かと」  
公卿「血、だと……？」  
道誉「元弘の変以来、いささか多くの血が流  
され申した。いくさで流された血は怨みに  
満ち、この京の護りに僅かな綻びを生じさ  
せた由。要たる京の護りが万全であればこ  
そ、讃岐の鎮めも機能するものかと」  
公卿「いくさ……？　なれば讃岐院の目覚め  
は、貴様ら武士が撒いた種ではないか！  
どうするつもりじゃ！」  
公卿が投げつけた扇子が額に当たり、一  
瞬だけ道誉はムツとした表情を浮かべる。  
御簾の向こうから声がするが、その声は  
震えている。

後光厳天皇「さ、佐々木道誉よ……」  
道誉「……はっ」

後光厳天皇「檢非違使の職責をもつて、佐々

木一党は不逞の妖どもを討滅せよ。……わ

かつたな。決して京に入れてはならぬ」

道誉「……」

公卿「主上の仰せである。否やはあるまい

な」

道誉「……御意」

澁面を気取られないように、深々と頭を

垂れる道誉。

②③ 都大路・夜

辺りには灯りらしい灯りもない暗闇の中、

供もなしで屋敷への道のりを歩く道誉。

その表情は憮然としている。

道誉「我ら武士がすべて悪いと言うか……」

崇徳帝が怨霊となられたのは、もとほとい

えば白粉くさい公卿どもの……ええい、胸

くそ悪いっ！」

周囲にモヤが流れてゆくのを一瞥し、歩

みを止める道誉。

モヤの中からゆらりと立ち上がる妖。雑  
兵姿の妖はニヤツと笑みを浮かべたよう  
に見える。

妖 「ぐおーおーおーおーっ！」

道 誉 「ふんっ！」

くわっと目を見開き、気合いを飛ばす道

誉。その圧力に砂のように崩れ去る妖。

道 誉 「すでに実体を持つ妖までいるとは……

さらに綻びが広がっているとみるべきか。

ならば、いくら胸くそが悪かろうと、放つ

ておくわけにもいくまい」

苦々しげにつぶやくと、足早に屋敷へと

向かう道誉。

②④ 瀬戸内海・夜

丑三つ時。

霧の瀬戸内海に大規模な船団が浮いてい

る。霧の隙間から船の舳先に忍び装束の

鬼若が、ぴくりとも動かず、逆さに吊る

さされているのが見える。

船にはところどころが破れた胴丸姿の雑兵たち。そして掲げられているのは白い源氏の旗。船団の先頭には唯一煌びやかな鎧をまとった源為朝が腕組みをして、京の方向を見据えている。為朝「者ども、さあいくさじゃ！」

②5 京の町・夜

為朝の船団が京に近づくにつれて、京の町にはモヤがさらに深く立ちこめ始めている。あるものは雑兵、あるものは獣に似た妖が洛中の神社仏閣を襲い始めている。

②6 佐々木屋敷書院・夜

外を睨み付けている道誉。小走りにやってきた家臣が廊下に控える。家臣はすでに漆黒の小具足を身につけて、臨戦態勢である。

家臣「殿、妖どもが社寺を襲っている由」

道誉「動ずるな。表鬼門の比叡山、裏鬼門の

石清水八幡宮の要が陥ちぬ限り護りは健在。

奴らとてそれくらいわかっているはず」

家臣「では……」

道誉「本命はこのあと来る。影働きの兵をす

べて屋敷に集めよ」

家臣「すべて……でございますか。各地の兵

をまとめるにも一兩日はかかるかと」

道誉「ならば、集められるだけで良い！」

家臣「御意」

②⑦ 佐々木屋敷広間・夜

板張りの広間で道誉が静かに舞っている。

その傍らで鬼阿弥が鼓を打っている。だ

ん、と大きく床を踏みならしたところ、

舞をやめる道誉。

鬼阿弥「いささか今日の舞は精彩に欠けます

な。主上に無理難題でも？」

道誉「そんなことではない」



鬼阿弥「ならば……何か迷いでもございますか？」

道誉「ぼそりと」利用価値、か」

鬼阿弥「……は？」

道誉「昼間三奈に言われた。利用価値があるから、連れ戻したのだろうと」

鬼阿弥「なるほど。では、すべて話されればよろしい」

道誉「お前の中には鬼が棲んでいる、などと話してどうなる。知らずとも良いことだ」

鬼阿弥「京童にあれぞ婆娑羅者よ、と囃された佐々木道誉も人の親ですかな」

道誉「親らしいことはひとつもしてやれぬが、せめてあの子を……三奈を鬼にだけはしたくない」

鬼阿弥「しかし、そのために本多清二郎にも過酷なさだめを課することになる。できれば鬼の宿命を背負うは我らまでにしとうござい

いたしましたな……」

道 誉 「背負わせはせぬさ。地獄に逝くのはわ

しとお前だけでいい」

二人、くっくっくくと笑う。

⑳ 佐々木屋敷 三奈の居室・夜

寝間着から普段の装束に着替えている三奈。まだ顔色は悪いが、柱に寄りかかるようにして立ち上がる。

三 奈 「私はあの男の道具じゃない：：いつも

言いなりだと：：思うな：：」

刀を支えにして部屋を出てゆく三奈。

㉑ 佐々木屋敷 中庭・夜

屋敷の中は家臣らが走り回り騒々しい。あまりの騒がしさに三奈は中庭に出てくる。漆黒の小具足を身につけた兵たちが集まり、かがり火まで焚かれている。

三 奈 「苛立って」何事だ！」

三奈の問いに答える者はいないが、その物々しい雰囲気に三奈は息を呑む。

三奈「いくさが……始まる？　どこと？」

道誉「廊下を歩いてくる。」

道誉「そのなりはどうした。屋敷を出ること  
は許さぬと申しつけたはずだな？」

黙って横を通り過ぎようとする三奈の腕  
を取る道誉。だが、それを力一杯振り払  
う三奈。

三奈「自分の歩む道は自分で決めます！」

道誉「ならんっ！」

三奈「なぜですか！　ただ屋敷に閉じ込めて  
おくために連れてきたのですか？　これは  
妖とやらのいくさなのでしよう？　利用価  
値があるというのなら、私をいくさに出せ  
ばいい！」

道誉「ちがうっ！」

三奈「ならば、なぜ連れ戻した！」

道誉「……っ」

思わず手を振り上げる道誉。だが、三奈  
は一步も引かずににらみつけると、おぼ

つかない足取りながらも門の方へと歩いてゆく。  
ぐっとこらえるように手を下ろした道誉のもとに高秀が来ている。  
高秀「三奈はやはり父上の娘です。婆娑羅者は誰の指図も受けない。ただ己が信じた道を行くのみ」  
表情を見せないように、高秀に背を向ける道誉。  
道誉「高秀、將軍家のおもりはお前に任せただ。早う、行け」  
苛立つようにその場を離れてゆく道誉の背中に向かって、高秀はひとりごちる。  
高秀「三奈は強い子ですよ。父上が思っているよりも」  
③⑩ 京の町・夜  
黒いモヤが渦巻いている京の町。すでに町を歩く者もない。  
足取りが危なげながらも三奈が歩いてく

る。その後ろを清二郎が追いかけてくる。  
三奈「ひとりでもいいと言っただろう！」  
清二郎「病み上がりなんですから、そんなわけにいかないでしょう？」  
立ち止まり、不思議そうに清二郎を見る  
三奈「三奈。」  
三奈「清二郎：何かあったか？」  
清二郎「は？」  
三奈「い、いや：：その、いまちよっと雰囲気が変わったように見えた」  
清二郎「はは、ほれ直しましたか？」  
三奈「ば、馬鹿なことをっ！ やっぱりのせいだな。よく見ればいつもの軽薄で、頼りない清二郎だ」  
清二郎「酷いなあ。（緊張して）：：お嬢！」  
黒いモヤの中から妖の兵が数体立ち上がって来る。じりじりと三奈たちの方に向かってくる。

三奈「これが妖、か」

一斉に三奈たちに襲いかかる妖。それを  
迎え撃つ三奈。刀一閃。ぐしゃりと妖は  
倒れるがすぐに起き上がってくる。  
三奈「そんな。手応えはあったのに……」  
さらに増えてくる妖たち。その背後に巨  
大な騎馬武者――為朝が現れる。  
為朝「なんだあの小娘は」  
遠目で為朝の姿を見た途端、三奈は再び  
ドクンと激しい鼓動を感じる。思わず胸  
を押しさえ、膝が折れる。  
三奈「また……同じ痛み……違……もつと強  
く……んぐつ……何か……」  
ドクン。ドクン。ドクン。鼓動はさらに  
激しくなっただけ、三奈の身体に被るよ  
うに鬼の姿が浮かび上がる。自分の手が  
鬼の手に見えて、愕然とする三奈。  
三奈「この手……なに……」  
清二郎「これは……鬼」  
「ん？」  
「という表情をする為朝。  
動けない三奈に向かっ襲いかかる妖た

ち。それを見た清二郎は懐から錦の袋に  
包まれた笛“鬼哭”を取り出し、奏でる。  
笛の音が響いた途端、妖たちが地に伏せ  
動けなくなる。  
妖「ギギ：：？」  
地に伏せてゆく妖たちの姿を見て、目を  
剥く為朝。  
為朝「：：つ。この音色はなんだ？ 我が手  
勢になにをした、その若造っ！」  
清二郎「あいつ：：鬼哭が効かない：：？」  
再び一心不乱に笛を吹き始める清二郎。  
為朝「雑兵どもならばいざ知らず、その程度  
の力で、この為朝の動き、封じられると思  
うてかっ！」  
清二郎「どうして効かない。：：お嬢っ！  
ここは退きましたよ！ お嬢っ！？」  
三奈「だめだ、身体が自分のものじゃないみ  
たいで：：清二郎：：逃げろ！」  
清二郎「そんなわけにいかないでしょう！」

為朝「小娘、何者かは知らぬが逃がしはせぬ！」

離れた位置であるにも関わらず太刀を振るう為朝。その剣風が刃となつて妖の兵ともども切り裂いてゆく。三奈に覆い被さるようにした清二郎の背中が切り裂かれる。

清二郎「んあっ！」

ふらつきながらも、三奈を抱きかかえて逃げてゆく清二郎。

為朝「ちっ：：かすっただけか。まあ良い、

佐々木の方が先だ」

③① 佐々木屋敷近く・夜

三奈を横抱きにしたまま屋敷へと向かう清二郎。その切り裂かれた背中からは血が流れ落ちている。

清二郎「お嬢：：しっかかりしてください。後もう少しで屋敷です。だから：：」



三奈「私は一人で……一人で自分の道を歩くんだ……誰の手助けも……いらぬい」

清二郎の手を払い、おぼつかないながらも、ひとりで歩き出す三奈。

三奈の胸の奥で、再びドクンと激しい痛みとともに脈打つ。

三奈「んっ！？」

清二郎「お嬢っ！」

三奈「はあはあ……はあ……」

道誉「馬鹿者が、何のために清二郎をつけたふらつく足で前のめりに倒れてゆく三奈。それを受け止めたのは道誉だった。

と、思っている」

三奈「佐々木……道誉……お前に……お前になど頼ら……ない」

道誉「わしに頼りたくないのなら、頼らんでもいい。だが、清二郎には素直に頼れ」

三奈「私は……ひとり……も……」

道誉の腕の中で意識を失う三奈。ふらつきながら清二郎が追いついてくる。

清二郎「殿。先ほどからお嬢の様子……」

道誉「強大な妖気に触れ、三奈の中の鬼が目

覚めようとしているのだ」

清二郎「やはり……」

道誉「できれば永遠に目覚めて欲しくはなか

ったが、この上は……かねて伝えたように。

わかっていゝな、清二郎」

三奈の身体が跳ね上がる。ドクン、ドク

ンと鼓動に合わせるように三奈の身体に

重なってゆく鬼の影が濃くなってゆく。

道誉「早う行け！ もはや一刻の猶予もなら

ん！」

道誉の言葉にうなずき、三奈を抱き上げ

ると屋敷の門へと急ぐ清二郎。

③ 佐々木屋敷三奈の居室・夜

居室に敷かれた布団の中で三奈は、うず

くまるようにして震えている。時折、三

奈の身体と鬼の姿が重なって見える。

清二郎「お嬢……いますぐ楽にしてあげます

からね」

清二郎「目覚めさせるものか……お嬢の中の鬼を……絶対に」

③③ 回想・佐々木屋敷土蔵

道誉に促されて土蔵の中に入ってゆく、清二郎。そこには鬼阿弥が待っている。鬼阿弥「清二郎。これより先は修羅の道ぞ。覚悟は良いのだな？」

深くうなづく清二郎の前に、笛“鬼哭”が差し出される。道誉「鬼哭。妖を封じ、鬼を鎮める笛だ」

清二郎「鬼……？」

鬼阿弥「じゃが、これを吹くには鬼哭と一心同体にならねばならぬ。その身に鬼封じの刻印を為すことで、な」

鬼哭を手にとって、考え込む清二郎。清二郎「そうすることがお嬢のためになるんですね？」

道 誉 「三奈の中に棲む鬼を鎮める音色。それ

は どんなに辛かろうと、あの子とともに歩

む 覚悟のない者には奏でることとはできん」

清 二郎 「ならば：：」

前 に進み出る清二郎。

清 二郎 「迷いなどありません。とうにお嬢の

歩 む道を、俺も歩むと決めていきます」

晴 れやかな笑みを浮かべる清二郎。

③④ 佐々木屋敷三奈の居室・夜

回 想から戻って。

清 二郎がゆつくりと笛を吹き始めると、

その額に梵字が浮き上がる。音色が響く

たびに苦悶の表情を浮かべ、もだえ苦し

んでいた三奈の表情が穏やかに変わる。

反対に清二郎の表情が険しく、苦しげに

なあってゆく。額を伝わる汗。

三 奈 「うっすらと目を開け」なんだ：：なに

を やっている、清二郎」

三 奈の問いに答えずに一心不乱に笛を奏

で続ける清二郎。

③⑤ 佐々木屋敷周囲・夜

屋敷をぐるりと囲むように妖の軍が揃つてゐる。その中に馬上の将、源為朝の姿が見える。嘲るような笑みを浮かべる。朝「このよな屋敷、ひと揉みにしてくれろわ！ 佐々木の兵など何ほどのものぞ。行くぞ者ども！」

為朝の声に合せて妖の兵たちの間から地の底から響いてくるようなときの声があがり、ゆつくりと進み始める。屋敷の塀にたどり着いた妖が、見えない壁に弾かれ、砂のよに崩れ去つてゆく。朝「小賢しい結界め。かまわぬ、このまま力押しに切り崩せい！」

妖は塀に取り付いては崩れ去り、さらにその屍を越えて前へと進む。妖の一体がようやく塀に取り付くと、屋敷内から矢が放たれ、砂のように崩れ去

る。それを合図にしたように屋敷の門が開かれる。佐々木の兵「妖どもめ、一歩たりとも屋敷の中には入れぬ。八幡神の矢を受けてみよ。」  
：放て！  
その下知に呼応し、一斉に矢を放つ佐々木の兵たち。次々に矢に貫かれ、倒れてゆくが、次から次へと湧いて出る妖の群れ。  
佐々木兵「なんだ、こいつら……まだ湧いて出るのか！」  
犠牲をもとせずに前進する妖の兵に、やがて、佐々木の兵は押されてゆく。ついに屋敷内に妖の一隊が入り込み、乱戦になる。  
為朝「佐々木よ、もうこれで終いか。つまらない。つまらないぞ。これではわしが出る幕がないではないか！」  
大音響の為朝の声が響く。  
③⑥ 佐々木屋敷書院・夜

③7 佐々木屋敷土蔵・夜

外の乱戦の音が響く中、小具足をまとつたまま、ただ瞑想にふけている道誉。家臣が戦況の報告に現れる。用意の八幡神の矢も尽き、劣勢でございます」

何かを決したように、カッと目を開く道誉。

道誉「やはりあれを使うしかない、か……」

側に控えていた鬼阿弥はボソリとつぶやくように言う。

鬼阿弥「よろしいので……？ 姫様への影響も大きゅうございますが……」

道誉「なるべく早く片をつける。……しばし耐えろよ、三奈、清二郎」

書院を出て土蔵の方へと歩き出す道誉。ただ一人残された鬼阿弥。

鬼阿弥「再び現世に鬼が降臨する、か」

鬼阿弥はじつと手元に置かれた鼓に視線を落とす。

真っ暗闇の土蔵の中。外では乱戦の音が響いている。ろうそくを手にした道誉が入ってくる。土蔵のもっとも奥に鎮座する、一振りの刀の前で立ち止まり、黒鞘のそれに手をかける。

道誉「鬼の力をもって妖を斬る“鬼斬”……」  
またこれを使うことになるうとはな  
鬼斬を持ち上げ、じつと見つめる道誉。

③⑧ 佐々木屋敷周囲・夜

塀を乗り越え、佐々木屋敷内へと雪崩れ込んでゆく妖たちを、馬上からつまらなそうに見ている為朝。

為朝「これが佐々木の兵か？ 主上も親父殿もこいつらの、いったい何を恐れておられたのだ」

③⑨ 佐々木屋敷中庭・夜

そこかしこに倒れている佐々木の兵を妖



道 譽 「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

クンドクンと鼓動が早くなつてゆく。

てゆく。それに呼応して、道譽の中で

鼓の音が再び激しく、早く打ち鳴らされ

に刃を向けたこと後悔させてやろうぞ！」

鬼のすべてを解き放て！ この佐々木道譽

道 譽 「鬼阿弥よ、かまわぬ：：我が内に棲む

進め、にやりと笑みを浮かべる。

ち。道譽は鬼斬を抜くと一歩前へと歩を

ようやく気づいたように顔をあげる妖た

道 譽 「うおおおおおおおおおおおお」

なつてゆく。

鬼の姿が浮かび上がり、次第に道譽と重

てゆつくりと、やがて激しく舞い始める。

手にした道譽が進み出、鼓の音に合わせ

かがり火に照らし出された中庭に鬼斬を

もしない。

は兵を喰らうのに夢中で顔をあげようと

どこからか鼓の音が聞こえてくるが、妖

が喰らっている。

清二郎（声）「俺の力で鬼を押さえたいら  
 れ  
 その額には脂汗が浮いている。  
 必死の形相で鬼哭を吹いている清二郎。  
 三奈「うが」「」「」「」「」「」  
 んでいる。  
 三奈の身体には鬼の影がゆらゆらと浮か  
 聞えてくる鬼阿弥の鼓の音に呼応して、  
 ④ 佐々木屋敷三奈の居室・夜  
 払い、ただの肉片へと変えてゆく。  
 道誉が走り抜けるたびに鬼斬が妖をなぎ  
 妖の軍勢に斬り込んでゆく。鬼と化した  
 爛々と目を輝かせ、鬼の咆吼をあげると  
 い。うおおおおお。おおおお！」  
 が鬼神舞、しかとその目に焼き付けるが良  
 道誉「妖どもよ、冥府に叩き返される前に我  
 体化し、姿が鬼そのものと化す。  
 け飛んでゆく。鬼の影は完全に道誉と一  
 盛り上がり、まどつていた小具足がはじ  
 咆吼とともに道誉の筋肉が異常なまでに

るのもそう長く……ない……早く……」

目を爛々と輝かせた三奈は突然起き上がり、清二郎の腕に噛みつく。鋭く尖った犬歯が腕に突き刺さる。

清二郎「ぐあっ……」

途切れる笛の音。

清二郎（声）「ここで吹くのをやめたら……」

お嬢は……鬼になってしま……」

再び鬼哭を奏で始める清二郎。

清二郎「んぐっ……」

三奈は清二郎の首筋に噛みつくが、それでも清二郎は奏でるのをやめない。

目を紅く輝かせたまま、三奈は涙を流し始める。

三奈「……清二郎……もういい……逃げろ。」

このままだと私はお前を食い殺してしま……

かもしれない……そんなことはさせないで欲しい」

清二郎「構いませんよ……お嬢に喰われるなら本望……」

三奈は大きく口を開け、清二郎の喉笛に  
噛みつこうとする。そのとき鼓の音が止  
み、スッと何かが抜けたように三奈の動  
きが止る。  
三奈「……」  
清二郎「……はは、どうやらお嬢に食べられ  
ずに済んだみたい、ですね」  
へなへなと崩れ落ちる清二郎。  
④ 佐々木屋敷中庭・夜  
静寂を取り戻した佐々木屋敷。そこかし  
こに佐々木の兵の死体が転がり、すべて  
まともな形状を止めていない。動く者も  
ない。その中央で鬼斬を手にした道誉が  
微動だにせず仁王立ちしている。  
清二郎の肩を借りて、三奈が庭に出てく  
る。  
三奈「あれが……佐々木道誉、なのか？」  
道誉は冷却期間に入ったかのようにふう  
ふうと唸り声をあげるのみで立っている。

ふらふらと近づこうとする三奈の肩をつ

かんで止める鬼阿弥。

鬼阿弥「しばし、待たれませ」

三奈「……？」

鬼阿弥「いま殿は鬼と人の狭間から戻って来

られようとしている」

三奈「鬼……？」

思わず自分の手を見る三奈。しかし、い

まは鬼の影はなく、自分の手でしかない。

三奈「私の中にもあのようない鬼が……？」

黙ってうなづく鬼阿弥。

④ 佐々木屋敷周囲・夜

麾下の兵たちが破れたことに苦々しげな

表情を浮かべている為朝。

為朝「おのれ……鬼とは……あれが佐々木の

切り札か……。……まあ良いさ。佐々木道誉よ、

雑兵程度に切り札を切っちゃったら」

ニヤリと笑うと、身の丈ほどもある巨大

な弓を取り出し、これもまた巨大な矢を

つがえる為朝。

為朝「あとはもう何も残っちゃいない……」

ぎりぎりと弓を引き絞る為朝。

為朝「だろぅがっ！」

気合いとともに風を巻くような轟音を立てて矢が放たれる。

④ 佐々木屋敷中庭・夜

塀を突き破り、巨大な矢が飛来する。誰もが息を呑む間もなく、その身体を矢に貫かれる道誉。

道誉「んぐっ……」

口から血塊を吐き出すと、鬼斬を手から落とす道誉。そのまままゆつくりと後ろに

倒れてゆく。

三奈「……え？」

憑かれたような表情で一歩、また一歩と道誉のもとに歩みよる三奈。

三奈「ちよつと……」

道誉「……」

三奈「：：しっかかりしてよ！　そんなことで  
：：死ぬんじゃないわよっ！」  
道誉「駆け寄り、道誉を膝に抱きかかえる三奈。  
道誉「：：っ。すまん：：な。最後の最後まで  
で：：父らしいこと：：できなかつた、  
な」  
三奈「：：私の方こそ、まだぜんぜん娘らし  
いことできてない。だから：：そんな簡単  
に死なないでよ」  
道誉「どうした：：急に：：」  
三奈「清二郎と鬼阿弥の爺から：：全部聞い  
た。私の中に鬼がいること：：そして、ど  
うして屋敷に連れてこられたのかを：：」  
道誉「：：もうよい。だが、お前のこと、わ  
しは最後まで守れ：：そうにない、な：：」  
すまん」  
三奈「言ったでしょう。私は自分で歩く道を  
決めるって：：。大丈夫だから。父上にそ  
こまで心配して：：。大丈夫だから。」  
道誉「それでも心配するのが、父親：：とい

うものだ……三奈……お前を……鬼にした  
 くは……なかつた……  
 がくりと崩れ落ちる道誉。  
 三奈「父上……？　そんな……これからやっ  
 と親子になれる。そんな気がするの……  
 また私を置いていくの？　……そんな……な  
 い」  
 為朝「は……は……は……佐々木の者どもよ、頼  
 みの大将もその程度か。もう少し楽しませ  
 てくれるものだと思つたが、意外と脆かつ  
 たな」  
 道誉をその場に横たえようと、うつむきな  
 がら立ち上がる三奈。その肩が震えてい  
 る。  
 三奈「お前が父上を……殺つたのか……」  
 ドクンドクンドクン。立ち上がった三奈  
 の身体に鬼の影が重なってゆく。  
 三奈「お前が殺つた……殺つたんだな」  
 じろりと為朝を堀の穴越しに睨付ける三



為朝「小娘が！」

い、堀をそのまま突き破ると為朝に迫る。

距離を一瞬で詰める三奈。鬼の影をまと

早く、人間離れした跳躍力で為朝までの

清二郎は鬼哭を取り出すが、吹くよりも

清二郎「お嬢っ！」

つてこれなくなる！」

鬼を解き放つては、現世（うつしよ）に戻

鬼阿弥「なりません、姫様！感情に任せて

は鬼斬が握られている。

獣のような咆吼をあげる三奈。その手に

おおおおおおおおおおおおおお

三奈「父上のことを侮るな！……うおおお

嘲るような笑みを浮かべる為朝。

に転がっている父親の仇を討つか？」

娘であったとはな。どうする、そこで無様

為朝「ほう、先ほどの小娘か。貴様が道誉の

が早くなつてゆく三奈。

ドクンドクンドクンドクン。さらに鼓動

奈。その目は紅く輝いている。

三奈「うおおおおおのおおのおおのおおのおお」

為朝「速い」

驚きの表情を浮かべる為朝の横を走り抜

けてゆく三奈。そのまま時が止ったよう

に二人とも微動だにしない。

為朝「はは：：こけおどし、か」

ニヤリと笑みを浮かべた為朝の胴がゆつ

くりと横にずれてゆく。自分が斬られて

いる事によろやく気づいて、驚きの表情

を浮かべながら胴体がまっ二つになる為

朝。

為朝「馬鹿：：なの：：この俺：：が：：」

両断された為朝は驚きの表情を浮かべた

まま、砂のように崩れ去ってゆく。

④④ 讃岐・崇徳帝陵墓の奥

崇徳帝と源為義がまるで壁を見通すこと

ができるかのよう天井を見ている。

崇徳帝「為朝が敗れたか：：」

だが、残念そうには見えず、むしろ楽し

んでさえいるように見える。為義もまた呆れたようにため息をつく。

為義「御意。まったく：：為朝は直情径行で

いけませぬ。正面から力押しなどと、あの

気性は死んでも治りませぬようで」

崇徳帝「それにしても：：あの己が内に鬼を

棲まわせた小娘。埒外であつたが面白い。

面白いのう。我が手元に欲しいものよ」

④ 佐々木屋敷中庭・夜

黒い雲が晴れ、月が見え始めている空。

清二郎たちの方を振り返る三奈。目は紅

く輝き、鋭い牙がのぞいている。ニヤリ

と笑みを浮かべ、楽しそうに見える。

清二郎「お嬢：：？」

跳躍し、一気に清二郎に迫る三奈。鬼斬

を腰だめに構え、身体ごと清二郎にぶつ

かっつてゆく。

清二郎「んぐつ：：」

自分の身体を鬼斬が貫いているのを見る

清二郎「はは：：お嬢：：冗談、でしょ。帰  
 ってきてくださいよ：：そんな怖い顔：：  
 してたら、せっかくのかわいい顔が：：台  
 無し、です：：よ」  
 鬼阿弥「清二郎！ 姫様にはもうお前の声は  
 届かぬ！」  
 清二郎「そんなわけないじゃないですか：：  
 お嬢はきっと戻ってきます：：鬼になんか  
 なるわけ：：だから：：さっさと戻って  
 来い：：佐々木三奈っ」  
 びくん、と清二郎の声に反応する三奈。  
 力尽きたように三奈にもたれかかる清二  
 郎。その姿を見て、三奈はゆつくりと自  
 分の意識を取り戻してゆく。  
 三奈「せい：：じ：：ろう？」  
 清二郎「：」  
 三奈「これは：：私がやったのか：：？ 私  
 が清二郎を：：こんな目に：？」  
 沈痛な表情を浮かべる鬼阿弥。

鬼阿弥「ご自分を責められますな。すべては  
 御身の中に棲まう鬼が為したこと」  
 三奈「言うな！ その鬼を解き放つたのは私  
 だ：：私が清二郎を：：うおおお！！」  
 号泣しながら三奈は力一杯清二郎の身体  
 を抱きしめる。  
 清二郎「：：つてえ：：」  
 三奈「：：ん？」  
 清二郎「：：いつてえ：：お、お嬢：：ちよ  
 っと痛い：：です。結構な深傷なんですか  
 ら：：優しく：：」  
 三奈「清二郎：：生きてたのか？」  
 清二郎「は、はは：：だってお嬢と一緒に同  
 じ道を歩むと決めたんですから：：その道  
 がどんなに辛く険しい道でも：：だから、  
 ここで脱落なんてできません：：よ」  
 三奈「私と同じ道、か：：」  
 泣き笑いの表情を浮かべる三奈。  
 三奈「馬鹿だよ：：いつもいつも、私なんか  
 のために清二郎は：：：：けど、良かった。本

当に……

もう一度力一杯清二郎を抱きしめる三奈の姿――。

④⑥ 佐々木屋敷中庭・夜

夜空は晴れ渡り、大きな満月が出ている。

荒れ果てた中庭に三奈がひとり立っている。その手には鞘に納められた鬼斬。目の前にかざし、ゆつくりと鞘を払うとその刀身に月光が反射してきらりと輝く。

三奈「父上……」

道誉（声）「お前を……鬼にしたくは……な

かった……」

微笑する三奈。

三奈「やっぱり勝手ですね、父上は。でも、残念ながらあなたの娘はあまり聞き分けが良くないんです」

空を見上げる三奈。空には大きく輝く満月が出ている。

三奈「あなたは何と言おうと、私は佐々木の

家に列なる者として、妖からこの都を護つてみせます。あなたが歩んだ道。それが私も歩む道だと決めました。だって私にも父上と同じ婆娑羅の血が流れているのですから

「

父道誉に呼びかけるように満月に向かつてつぶやく三奈。

（了）